

マル赤馬鈴薯の産地維持と課題

広島県安芸津町 マル赤馬鈴薯出荷組合 顧問

うえおか しょう た
上岡 昇太

はじめに

安芸津町は広島県中央部にあり、瀬戸内海に面した温暖な馬鈴薯産地に適した産地で、名古屋から京阪神方面へ多量に出荷され、「丸赤」（マルアカ）の商標名で知られる知名度の高いブランド商品として活況を呈してきた。しかし、平成の時代に入っからは生産者の高齢化や担い手不足に伴い、収穫量が減少してきているため、地元広島市場を中心とした販売取引に変わって来ている。そこで「日本一美味しいじゃがいも」を目指してマル赤馬鈴薯出荷組合を中心とした馬鈴薯栽培への取組み状況を紹介することとした。

赤崎地区における栽培の推移

昭和22年（1947年）赤崎地区に暖地栽培（二期作）に適する品種改良の目的で、農林省西条農業改良実験所安芸津試験地が設置された。この施設は昭和25年に長崎（愛野）に移転するまでのわずか三年間ではあったが、赤崎地区での研究が基盤となり、長崎で「西海1号」（ウンゼン）と言う新しい品種が生まれ、その後再度改良が加えられた結果、「出島」（デジマ）が誕生することとなった。現在、大半の農家がこれらを栽培している。安芸津試験場は、その後県立農業試験場安芸津試験地、さらに町

立農業試験場として受け継がれ、馬鈴薯を中心とした畑作の改良や新品種の導入、採種事業を取り入れた栽培技術などが安芸津の馬鈴薯の発展に大きな役割を果たした。わが国での本格的な暖地馬鈴薯発祥の地は、木谷赤崎地区であると断言する人もいる。作付け・生産量はピーク時の昭和40年（1965年）には440ha 8000トンだったが、平成15年（2003年）には150ha 2000トン弱まで落ち込んでいる。

栽培適地としての条件

栽培適地となったのは、次の条件が考えられる。

- ① 土壌は、デイサイト溶結結晶凝灰岩（火山灰や噴石が堆積、溶結したできた火山岩）が風化してできたもので、鉄やアルミニウムなどの酸化物（粘土鉱物）を含み、ミネラルが豊富であり、栄養価の高い作物ができる。
- ② 土壌は細かな粒で、すべすべしている。固まりにくい性質を持っているため、馬鈴薯の表皮を保護する役目を果たしている。このことにより芋の肌は細かく、ツルツルして美しい。
- ③ 赤真砂土は粘土とは違い、通気性に優れ、排水が良い。雨が多い時でも早く乾燥するため、いつまでもベトベトし

ない反面、保水力が強く雨が少ない時は乾きを抑制する働きがある。また、長期間鮮度保持にも効果がある。(写真1)

- ④ 海岸に近い場所に畑があり、絶えず海風が吹いているので疫病にかかりにくい。
- ⑤ 年平均気温が15度前後と温暖で降水量も1300ミリと極めて恵まれた気候条件を備え、暖地栽培(二期作)に適した自然環境にある。

以上の条件を生かした生産から販売までをJAと生産者を「マル赤馬鈴薯出荷組合」を通して取組んでいる。



写真1 栽培地の風景

種イモと定植の準備

① 種イモ

食用馬鈴薯は多地域より取り寄せたものを使用する。現在は長野県産を使用しているが、今年は種イモが足りないため、1割は安芸津産を使用する。種イモ生産者は自家用を使用する。採種用馬鈴薯には長崎県の実種農場から取り寄せた種イモを植え、自分で作った原種を春植えする時には12月中旬より防虫ネットに入れたコンテナを加

湿施設に持込み20日～45日間加湿し、休眠を打破させたものを使用する。

② 定植の準備

マル赤の馬鈴薯の味は、赤崎の土でないと出てこないと言われる土づくりから始まる。JAで土壌検査を行い、ペーハー(4.0%～4.5%)を保つ為の土壌改良剤を使用するようにJAに指導を受ける。年二回作付するので、堆肥は欠かさず使用する。豊穰(バーク堆肥)、健肥(落葉+牛フン)、牛フンの3種類をマル赤馬鈴薯出荷組合でまとめて購入するため、馬鈴薯畑地力増強対策事業として東広島市とJAに対して約212トンの補助金申請を行った。強酸性土壌ペーハー4.0%以下の人は苦土石灰、水酸マグネシウム、マリンカルなどを使用し、4.0%～4.5%の人は硫酸マグネシウムを使用、4.5%以上はそうか病が発生しやすいのでフロンサイト粉剤、ガッテンペーパー等に切り替える。

定植

春の植付けは2月上旬から3月上旬迄で、秋は8月下旬から9月上・中旬迄に植える。植幅60センチの GANGI を切り、20～25センチ間隔で種子をまいて足で踏んで植える。春は足で踏まないで手で軽く押さえる程度で植える人もいるが、秋は足で踏まないと水分が逃げると言われている。植付け後、肥料を条播きして、その上に切りワラをまいて土をかけておく。土かけは管理機を使用する。近年は労力不足のため、小型の芋植機を使用する人が増えた。芋植機は1人用と2人用があるが、いずれも GANGI を切らなくて良いので、作業が楽になる。(写真2)



写真2 小型の芋植機での植え付け

また近年では春作のみだがマルチング（略してマルチ）栽培が増え、1月下旬から2月上旬に定植する。定植後2～3回雨が降ってからマルチを張る。透明マルチを張る人は草が生えるのでゴーゴーサン粒剤または水和剤を使用後にマルチを張る。（写真3）グリーンマルチはそのまま使用できるが、マルチ代金が透明マルチの2倍かかる。収穫は透明マルチが1週間くらい速い。またベタロンですとグリーンマルチより1週間遅くなるので、作付けの多い人は適期収穫が可能となる。マルチの穴あけが3月上旬から下旬にかけて始まり、晩霜にやられることがあるので、近年ではタキイト



写真3 マルチング栽培

レエースを穴開けと同時にスプレーして対応している。

中耕・元寄せおよび防除

① 中耕・元寄せ

春は4月上旬に中耕し、4月中旬に元寄せをする。葉色の薄い圃場では中耕の際にチッ素の少ない肥料を追肥し、元寄せは着蕾期までに盛土をしないと緑化芋が増える。秋作は中耕・元寄せの2回とも追肥する。秋作は春作より肥料多くが必要となる。

② 防除

JA芸南・全農広島県本部が毎年春・秋作馬鈴薯栽培管理指針に基づいて防除している。春作・秋作とも3回は行う。毎年同じ農薬を使っていると効果が衰えてくるのでローテーションを組んで農薬を変えるようにしている。食の安全を守るため農薬基準（ポジティブリスト制度）を厳守するため、ジェイエースまたはオルトランの使用時期を決めて前後の農薬を決めているのが実態である。また、ドローンによる防除を望んでいるが、ジャガイモ蛾に使用できる農薬がないので困っているのが実態である。また採種用馬鈴薯生産者はアドイヤー粒剤を必須として補助事業に取組んで対応している。（Yウイルスの減少化が見られる）

収穫（掘り取り）

収穫時期は、春作・秋作とも厳しい条件の中での重労働である。夏場にかかる春作は梅雨時期とも重なるため腐敗しやすい。マルチ栽培を普及すると雨が上がったらすぐに掘れる上、腐敗も少なく秀品率が高いので良いが、手間がかかる事と経費が高く

つく事が問題である。だが露地栽培で掘り遅れをすると蛾の発生率が高く、品質低下もまねくので適期収穫が最善である。近年では茎葉処理機や掘取機も多く導入され機械化されて短時間で仕事が捗るようになった。しかし、芋の取り入れは相変わらずの手作業で丁寧に行われている。(写真4)



写真4 芋の掘取り作業

選別・出荷

掘取り後5日以上、風化して土を落とし、JAより提示された要領に従って選別する。この作業は単純なようで忍耐が要求される。秀品に優品が混入していたり各階級の重量相異があったりすると、再選別を指示される個人名生産者番号出荷者は植付け時期、収穫時期、使用農薬、肥料などを記載した生産者工程管理日誌を提出しなければならないことになっている。近年ではJAがカメラ遠別機械の導入によってこの作業は楽になったが手数料がかさみ、手作業で済ます農家も依然として多くある。マルチ栽培は5月中旬より収穫が始まるので6月末までに販売を終え露地は6月中旬から収穫し、7月末までに販売する。主に広島市場に出荷するが、価格が安定しないので

スーパーや食協等にも直接取引きするようになった。

秋馬鈴薯は11月下旬より掘始め、1月末までに販売されるよう計画である。お中元、お歳暮にも多く売られるのでマル赤ダンボールも3キロダンボール、5キロダンボール、10キロダンボールと消費者の希望に応じて対応している。昨年は春馬鈴薯が高騰し、大阪万博以来の高値となった。秋馬鈴薯も珍しく高値販売となった。(写真5-1、5-2)



写真5-1 出荷前のマル赤馬鈴薯



写真5-2 出荷時の荷姿

終わりに

馬鈴薯最盛期に働き盛りだった人は80代となり、今は70代中心の産地となったが、「後継者がいない」「担い手リーダーがいな

い」という悩みは尽きない。作れば作るほど売れる条件が整っていても、消費に生産が追いついていかないばかりか減産が続いている。マル赤馬鈴薯出荷組合の目的である馬鈴薯生産者の親睦を図り、知識並びに技術の研鑽に努め、統一された技術により高品位生産をはかりJAを通じた共販体制を堅持し、経営改善をはかり、もって農家経済の向上発展を期する。JAも合併への動きがあり、どうなるかわからない。地域特産を守るためにも地元青果卸売業者自らが休耕畑を借り受け、客土事業を行いながら新しい馬鈴薯作り挑戦中である。農業法人も立ち上げ、中国人研修生を活用して良品質な馬鈴薯の栽培に乗り出している。お互いに作り方を相談しながら少しずつ結果を出している。秋馬鈴薯掘取機（写真6）

のように掘取しながらコンテナに拾う小型掘取機の現地研修を行い、改善を要する所が2か所あがった。マル赤馬鈴薯出荷組合員もすでに2台導入されている。昨年、当地域以外から3名が馬鈴薯作りに加わり、木谷地域の空き家を借り定住し始めた。価格が安定しないと生活が心配だが、「特産マル赤馬鈴薯」を絶やすまいと動ける間は生産を続けたいと思っている。



写真6 秋馬鈴薯掘取機での作業